

アイデンティティ/事業を突き動かす内発的動機

金森氏の家業は祖父の代から続くめっき加工業で、時代のニーズに応え続けた結果、現在のオジックテクノロジーズへと成長しました。金森氏は事業承継を見据え、表面処理を学ぶ必要があると考えたそうです。表面処理とは、素材表面に新たな性質や機能を付与する、素材の性能を向上・改善させる処理のこと。関東学院大学で表面処理の研究を行い修士号を取得し、大手薬品メーカーに就職しました。研究職および営業技術職、海外企業との折衝などを経験し、学生時代に学んだ表面処理の知識に深みを持たせ、2013年にオジックテクノロジーズに入社。技術系ミドルマネージャーとして新技術の開発や事業化に関する業務を担いながら、大学院博士課程に通い、研究にも携わる”二刀流“で経験を積んで行きました。博士号取得後、技術・品質の各部門でトップマネージャーに就任。同社が持つケミカル技術を中心に企業に必要な要素をブラッシュアップし続け、2023年に代表に就任し、現在に至ります。



SeeeKai活動で取り組む地域河川の清掃活動

ビジョン

地域社会を活性化する根となる企業へ。同社では「ケミカル技術を通して人々のしあわせを創造する」を企業目標に掲げ、半導体分野を中心にめっきを主事業としたケミカル技術を提供しています。事業活動以外には、SDGsブランディングや健康経営にも力を入れ、社員全員で会社の基盤風土を創る「改善(Kaizen)を見える化(See)し、イイね(e)があふれる会社を目指す活動＝SeeeKai（シーカイ）活動」という独自の活動にも取り組んでいます。

強みや特徴

オジックテクノロジーズのコアコンピタンスは、化学新和力であると語る金森氏。「化学新和力」は、社会に”イイね”をもたらす「考え、学び、進化（深化・新価）する能力」を定義した同社の造語になります。社会課題の解決と親和性の高い「ケミカル技術」、半導体～医療まで多分野で養われた「現場力」、地域とのつながりや企業風土を構築する「SeeeKai活動」、イノベーションを創出する「産学官連携体制」の4要素で構成されています。



仕事も趣味も充実できる環境

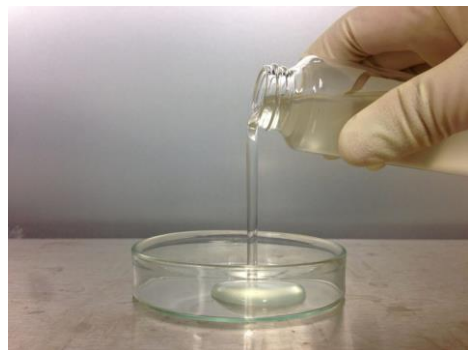
経営課題

課題として挙げたのが、半導体産業分野以外での事業創出でした。同社では熊本の主幹産業である半導体産業向けの表面処理が事業の大半を占めていました。半導体産業には、「シリコンサイクル」という3～4年周期で好況と不況を繰り返す市場傾向があり、その産業を中心に事業を展開する同社は大きな影響を受けていました。経営面への影響を出来るだけ抑えるためには、事業のポートフォリオバランスを見直し、半導体産業だけに依存しないビジネスモデルの構築が必要でした。環境の変化が著しいVUCA時代の中、新規分野への事業展開を検討する上で、同社事業の定義を「めっき事業」から「ケミカル事業」と見直すことにより、コアコンピタンスを活かせる分野が広がると考えた金森氏。この考え方が半導体分野以外での事業展開に繋がっていきました。

デザイン経営での解決策

同社が可能性を見出した事業分野は、バイオテクノロジー分野と医療機器分野でした。バイオテクノロジー分野では、地場ベンチャー企業と共創し、同社のケミカル技術を使って熊本の地域資源から化粧品原料を抽出する事業で化粧品分野へ参入を果たしました。また、医療機器分野では熊本大学などと産学医工連携プロジェクト「i-SCan」を結成し、「血中がん細胞を捕捉する医療機器の開発」に着手。学会発表に加え、現在は臨床試験を実施し、医療機器の製造販売に向けて準備を整えています。このようにパートナーを迎え、共創することで異分野への参入を果たしました。連携先の思いや考えに共感した上で、課題を解決するために、同社として何ができるのかを「考えて、学んで、進化/深化する」ことで企業の成長に繋がりました。多くの社会課題がある中で、「化学新和力」を活かし熊本だけでなく日本各地と連携し、SDGs実現に向けて大きく貢献することを目指します。

アウトプット



化粧品の原料となる「サクラン」



i-SCanの技術を表す模式図



これから

さまざまな分野へ展開し、事業を成長させることはもちろんのこと、会社を支える人材の育成定着が重要な課題になっています。金森氏は、業務から得られる達成感や成功体験だけでなく、ワークライフバランスの充実や健康経営への取り組みなどで、社員にとってやりがいがあり、居心地の良い場所を提供することが重要と考えています。地域社会や顧客だけでなく社員やその家族、全てのステークホルダーに幸せを届けることが出来る、働きがいと働きやすさのある会社にする未来を描いています。